



大寺國筒井清水

卷之六

檀勘左衛門誠忠傳

此中記ふとくハ  
良夜菰浪

實松奇國著  
淺山芦國画

~ 13  
3175  
6止



へ13  
3175  
6

大和國前井田清水卷之六



藤浪

浪華

濱松歌國

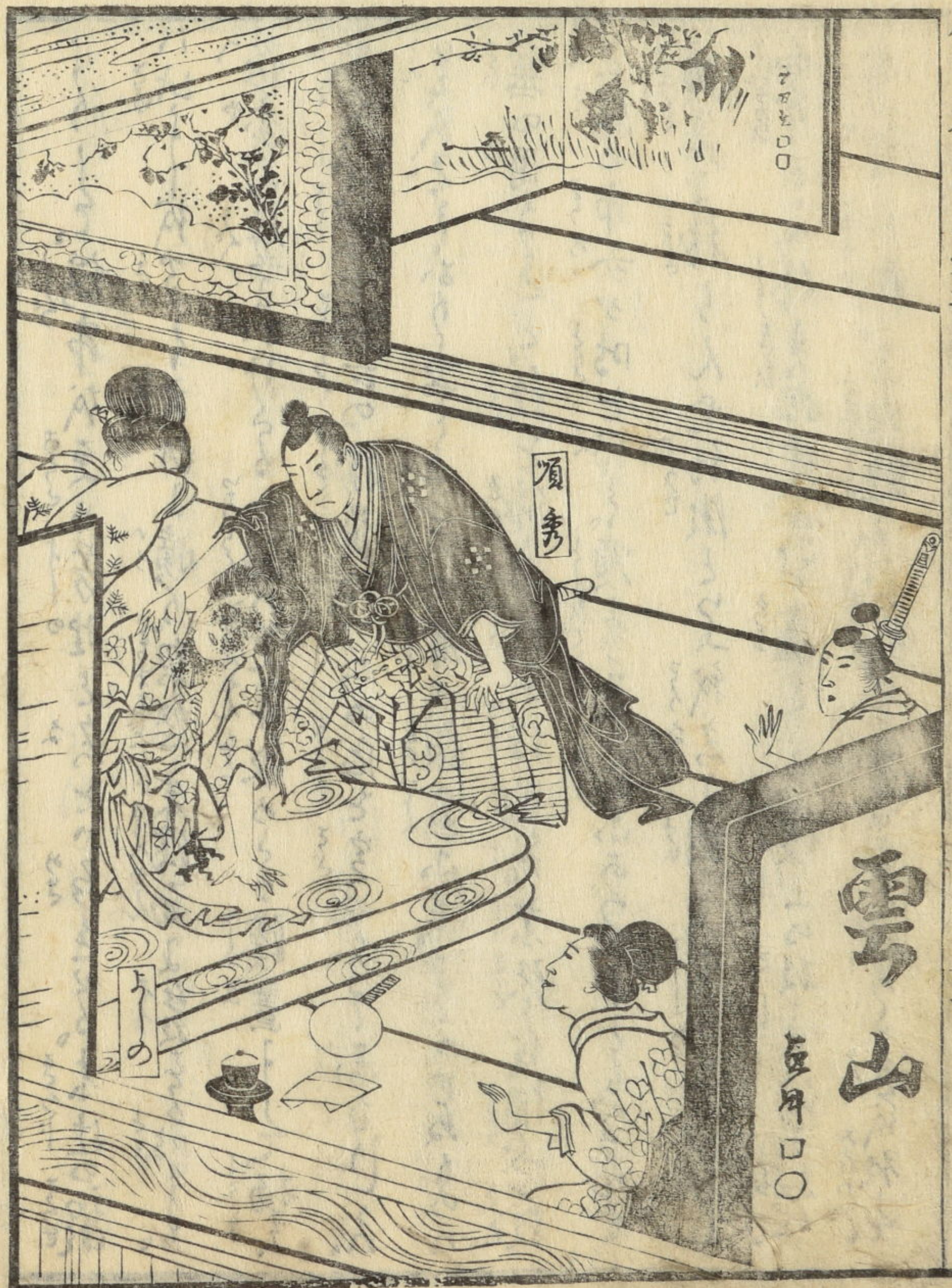
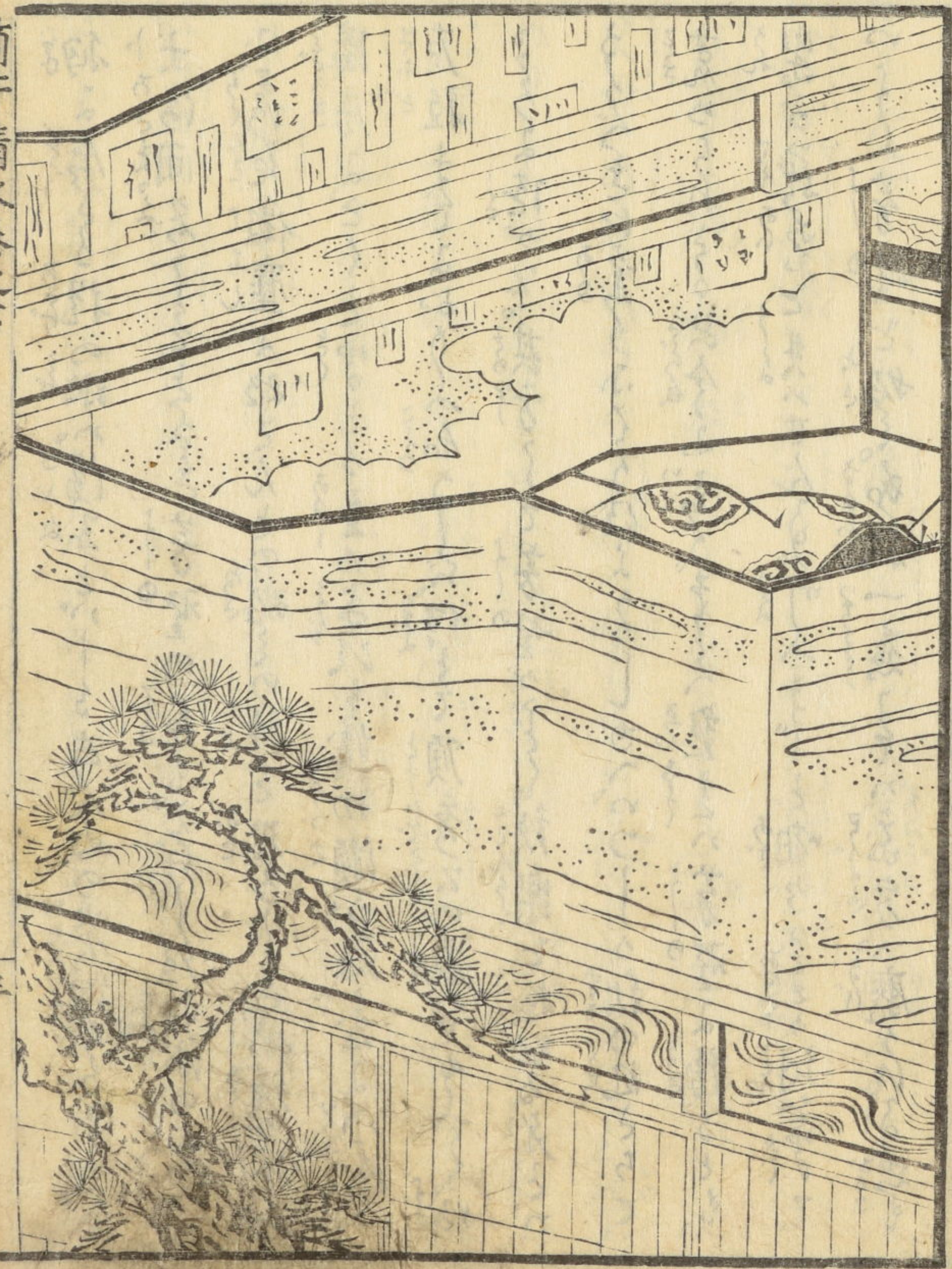
編集

備又山田源春ハ高取玄蕃が密計と用ひ今田くそ女以  
餅として年来の天皇初とくしど松も嬖臣生為盤じ  
三福川十市を置るど。昵近の諸士よひくうし恩賞以  
あつらん。油ひるく酒をきとあめまをよしあし。あつらん  
はの程をうしぬ。植樹の柱の辺小別業と三のりら。信孫を  
負いんらん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん  
うつら植る。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん

昭和九年  
九月九日  
請求

おは本日の初瀬。初瀬は。諸君の及ぶかぎりでも。容々の禪  
 娟とくも。初瀬に。務るとも。芳らドと。或て。紫が。香に  
 或ひき。倭布。半本の。似も。ぬ。狸。禮の。徒。  
 引。う。も。に。だ。め。初瀬。ひ。ま。ひ。の。は。は。  
 ナ。と。れ。香。衣。も。翠。か。あ。る。僅。れ。初瀬。月。日。ハ  
 送。り。も。あ。つ。さ。ふ。う。が。り。女。ま。も。も。香。牙。子。顔。は  
 ば。初瀬の。倭。敷。の。通。と。踏。か。て。う。ら。ま。の。冬。の。は。ド。先。  
 時。も。さ。つ。さ。の。さ。ま。  
 時。も。う。も。さ。つ。さ。の。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま。  
 時。も。う。も。さ。つ。さ。の。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま。  
 時。も。う。も。さ。つ。さ。の。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま。  
 時。も。う。も。さ。つ。さ。の。さ。ま。の。さ。ま。の。さ。ま。

う。う。し。と。倭。布。な。ま。め。芳。理。と。名。を。い。は。る。木。の。初。瀬  
 は。け。し。な。ま。め。大。い。と。憤。り。怒。氣。滿。面。は。さ。さ。さ。の。時。も。  
 初瀬の。禪。の。い。け。る。一。軸。は。う。ら。ま。の。漢。畫。と。し。て。揚。美。  
 此。唐。氏。君。が。双。六。の。務。員。に。一。二。の。底。を。定。め。ら。う。と。あ。ら。し。め。ば。  
 一。天。の。君。が。敵。も。も。ま。さ。つ。せ。ぬ。り。の。い。  
 三。輪。の。市。女。が。時。と。ほ。り。順。多。公。の。お。お。あ。つ。つ。と。も。ま。ん。ど。  
 這。身。は。初。瀬。と。い。ふ。我。名。は。對。し。の。對。候。と。つ。け。し。  
 公。介。さ。よ。揚。美。此。唐。氏。と。畫。と。う。ら。ま。の。漢。土。の。故。子。は。さ。つ。さ。  
 芳。理。初。瀬。の。名。競。ふ。競。お。し。と。奪。い。ん。と。始。め。る。も。ま。の。初。瀬。と。



順秀

雲山

五月口〇

御は居る。提の水は湯玉と。パーもきんあひの火火。細あらしき。富  
士海間名。そとまき。芳聖の花も。なげ。死初瀬の山。は  
小。尾。花。微塵。よ。ね。さん。との。姥。の。程。ぞ。思。ろ。し。と。始。終。の。容。ま  
隣。房。よ。ど。く。と。や。の。と。る。ま。の。よ。は。ま。清。初。瀬。が。姥。を。よ。入。り。  
た。程。ま。で。よ。り。よ。か。う。ぶ。付。と。て。順。秀。公。の。通。せ。の。う。ら。ぬ。  
ころ。よ。陸。が。い。其。方。に。そ。芳。聖。が。い。く。秋。樂。と。撫。む。身。と。い  
さ。う。ふ。と。に。余。り。ふ。と。う。は。よ。う。し。ち。い。つ。し。秋。の。風。と。ち。て。  
荒。れ。ら。れ。ら。の。只。今。ふ。あ。り。き。と。ん。熱。を。ハ。芳。聖。よ。務。る。とも。  
紫。ぶ。つ。結。ぶ。と。失。は。せん。の。叶。入。ま。と。と。嘲。々。る。ま。う。付。と。字。て。  
い。し。芳。聖。と。姥。の。如。程。一。意。と。ハ。あ。方。へ。塵。う。ら。る。思。も。

い。い。い。ま。ま。と。お。身。も。順。秀。公。に。ほ。ぐ。み。ま。ま。に。成。り。ま。ん。に。あ。ら。ぶ。  
後。妻。泉。の。品。惚。る。父。母。の。も。と。小。在。し。時。隣。家。の。女。二。郎。と。い。つ。  
狂。男。よ。初。て。妹。と。脊。の。か。ら。い。ひ。を。ま。い。二。世。や。ぐ。と。枕。し。が。  
父。母。は。け。り。や。あ。ま。と。ま。い。へ。嫁。し。り。ん。と。結。し。る。ま。ち。へ。た。と。ね。と。  
の。も。ろ。し。好。ま。ぬ。路。と。い。ふ。も。ま。ま。と。ま。ね。て。お。女。の。通。た。ど。と。  
彼。方。二。郎。ど。の。と。密。な。情。を。思。ひ。出。て。二。人。一。如。よ。例。川。へ。も。  
身。と。沈。め。ん。と。ま。ま。結。し。て。お。ま。の。言。路。を。た。ど。ら。う。日。は。な。ほ。  
せ。し。後。身。豪。氣。な。ま。ま。し。由。へ。通。の。不。く。つ。の。辻。堂。よ。妙。姿。を。思。せ。  
かの。悪。人。の。後。身。ぶ。く。ろ。と。ね。ん。と。引。え。せ。し。通。と。が。う。ん。う。ら。ぬ。し。  
け。ら。う。や。其。身。い。ま。う。つ。に。け。め。よ。ま。ま。い。ぬ。人。よ。肩。て。ま。ま。結。

小坂中といひま書のつりまきびき新しどのとふりひしがね明て  
の勢ふことい何またとへん才もさく割とくけた街へ賣後とまで  
夏更修練の才ともかもさくねさく世の業因なきは悔むは陰は  
去りても才は命返さるならせらひしぞせは丸の程もゆるま  
ほしく。まこと新しき思案と難かしく空陪子の夜夜若し。  
屈法師ともさくねんかゝるひし。世の中よ教とくはたは  
男系よて風儀よまきば操成通す修業とを於二道のけし女  
と徳とも母の島と借行さしと。傳ふる人の五沙法も徳し  
かゝげかりひし。とどくと虚実と操りし。二人を若るを  
遊らまじ。新しき事とのし。とさくは。路まじ。く。と。知。

まじりや芳野のゆりかたで角やで荒れらるをさくを悔し  
女のそと地まんおと。ねき修練の罪と造る。何年今月か  
百日のいともと後いらら。修業あがかりひ。時すのさならは。尚  
井家より續曲身金とせ大金飯のさくまじ。せん。とまに  
五くいひりまは。京来旅心源とよ次。湯は。身よりさる  
後合とて。其子殿とせよ。あつて。あつと。揚。く。大。若。若。に  
承引。くら。い。ねる。西。と。と。ま。な。し。ん。初。後。は。百。日。の。暇  
と。け。し。ま。り。け。里。よ。の。及。ひ。ら。り。抗。子。棒。婆。と。り。又。若。を。密。よ  
か。く。ひ。一。割。の。奇。業。を。求。め。と。せ。て。一。壺。の。酒。よ。を。し。芳。野  
係。る。子。殿。と。い。ひ。合。め。教。さ。の。美。金。と。ま。へ。り。と。い。は。る。若。若。抗。子

捧婆々と御号せし老女なまははは承引折成て首尾  
 しく仕お目せまいせんし竹の若もまゝ美合ぬ二尻らうい  
 霜月廿日ちやうのちやうらぶ。老陰久のて一場の糸よ借よ  
 とまをそまよ備本の忠嘆く。加増成あはす。所の名  
 とくまをそまよ。春日の望三望山のねう枝よ。一夜のるに  
 友の忠嘆く。はは向と成年ひ生生のやまは  
 ちやうとて。見おの徳人我一と群集るせり。竹井お  
 おも這陰ひのとえやのして。家門の業成はともあはし  
 本の根よ酒と落ど。四廻く火成焼ひ。時よははは  
 けらしからどとと。取放す。一家中の後區くあらとといと

どもいづと悪さな表よはあるま。植槻の別業ももうはさ  
 らえ。おえとに侍女さぶらひり。くくふあひるを芳野  
 もと秋のちやう順秀よ。別業まいつせとて。収束人  
 目掃る行山里のりの海し。任居とち時所うれば。俱よ  
 えまやしくかもし。はは君へあひらげく。了髪待婢お  
 ころぐ。よらつと。思ひやうよ。三望山べよ。兼て別業の容  
 る。成定成よ。狐子捧婆く。破勢斗略の所。来まうと用意  
 せし。一壺の酒成推りさへて。春日燈よ。つらう。向ふうまづら  
 下向の橋ひ。是く。順秀のむ。妻芳野よ。と公程にうか  
 ばと。成て。橋よ。付添よ。不髪が。袖ふと。くうて。ふ。道はく。と。る

多しとるものごとく是れは物のうらにすまへ植樹の別業よ  
 所給をさまと申しづれはふ芳型と白とやらんそりて  
 以て三福の里小おはせし時田植草と綿とりの折し同  
 子業とせし身の終まで果報とほらるるとい氏素姓も  
 婿ざりし這老婆も一人の女也を持するが思ふどま首を  
 するもともせめて母一人は除終中も安樂よ養ふ程の  
 果報とあやうくも小いけ行くと驚くぞ携へし九献  
 一ツ石とくも其御を戴せ女也も飲をくしと  
 まうし西を次いしくよたのまといと壺の酒はるを添て  
 指出す不骨者をも今も教もよ良坂や思ふ拍のよと表

倭人といひつれし顔末と携り芳型いととすうりて  
 子成かり親心とすうりて汲かてを女と知りぬ僕  
 と制し妙あづかよりやうりてを女にすまや入目好ま  
 途中も般達なるををせしれど老女といひ息女へのを  
 とるうし行りるしかるごとく是へと指あうりまは仕候し  
 たりと抗手捧安を件の壺を待女もが五次しと芳型は  
 一口飲とるはは押しおいた速く女也よちやうせ教女  
 教がうりては長居の思まを壺を懐に入是る希は  
 かくばえ歸るはたうも思ひの授るがおりの味しと  
 汲く悔しに壺が女の災はひとりぞといひぬが佛と神



ちうぐで道と迷めく下向ありしが其叔係は毒酒のまじり  
 あつはまに全牙は悪瘡と發しさしも貧人のやえうはし  
 容貌猛よま多し茶麿村とらる緑の黒髪は遠のこくりに  
 ちうぐに乳綿繡とおひふ素乳の青く控わづら。白粉と不どと  
 せし花の影も腐たぐまて真乳病床よ余り魚指とさびら  
 身の唇ハ爛ま列衣を黒血を流し穢けハ衣裾と汚す是えん  
 諸天界の悪くふ痲病とありらいつらおるま世の業因ごと  
 沙猿しと文と如くは流し流まぬ出しと傍のえり月も夜るる  
 順秀どのけしはすしとといふ不便のあやう良医典業に  
 治療を作て全愈いたすとすべしとありらるゆえ念ふ薬

陀が術とさつめ茶と秘といひも日は添く形質朽腐は  
 文よ人といええざりた順秀をさめくは拙ましういさあを  
 くらんを振あれしと出しとるれどその甲斐うたと怒ひ  
 せめてハ病床よ青信て芳野が心とまぶさめんとて今日  
 植槻の別業へ所入のよとつらう芳野いといは拘らざり  
 君の涙を有能くれどもけり沙猿しは形質少くまひ奉  
 らば二世まると約束くた盤橋の契く中も怨やせんめ  
 信しは首塚の林おも替る醜さい是れ小く申く能ありしと  
 たぐ一條よ女系のをう漱まこの具折く。相公の所へと知  
 せのまうらと怒るさ文田る。護身劔と振う速く咽に

かいと実立て何物と叫べば了髪待婢周章とむる瘵忘  
 小野考云もかけらううひのりい信する女も小雅の文と恥  
 自殺小乃不復さふお今日青竹むくひのるをたれもさせ  
 中死又もやまうし死と還るよし所為涙の老系も芳性  
 小若しは眼尻ひらと君の血と伏ねを敷さらぬ残しは文の  
 所藤和と襟さへある小淡くぬ所死しと奥加のやどの  
 思ろしくふりいらせし其うらふ所や佛も囀いせたりふ  
 世は涉猿しと病の床へ所入とすて這のどく人死鬼うと  
 ふうとたぬと山後あるおのやや相もはと敷のつらねお  
 ろまぬ入う目の所直名残おしとけせ女去る。残妻と衣と

おぼとまうし思まきとまきおぐう只一遍の称名とつとま  
 とももそのおの敷は指ゆく風信も全瘵より侵どるふ  
 鮮血まがれ出さうし不思議や毒酒の悪血去るか心地にお  
 のみと後し。芙蓉の血とせ柳の眉蟬娟たるおひよまいと  
 皆くも以撃ハ敷その中の敷敷より頂秀文も不ち多時お  
 右又たは回顧して備ハ所産と妬む老うらや毒業とあふ  
 瘵病とけういしむるとまきと全瘵より血去まばたらら  
 難病の治したまとも。這全瘵より再生いそ未ふしと血入  
 以日春日信のゆらさ老女が携へ来りくるかの酒を毒業  
 おくもとく小罵しるうら情や毒産ハ息短ぬ頭垂の然傷

いたとんかもあつてい果どして近寄る命じ  
 亡骸と野田小送らて我國よたまたま比せらるも芳野と  
 死出の山は移せしも毒酒とまへし老婆が野あさるひ  
 出して陰義とまへし芳野が眼を以て暗くせんとも密りふはせ  
 下知あつる備中へ三瀬の市人五十枚治九命ハ高取云  
 密斗ハ細ミシ倭布女と頭あつ妻とまへし探も仕合  
 とぼんとおひひしふ芳野が舌をしくあつる金の慶とん夫  
 たるどく北村にてつらつら澤家の阿次も飲んふつたりの  
 ねるゆへ共ニキキとなくかりのいぐ偶とん付しゆあつてま  
 治九命ふじうの備井頭あつる芳野が舌をしくあつる

毒酒と飲せし老婆あえなりとて密りよ陰義ありしとのり  
 まよ付れ身と奴家と合して陰義せバ知まどろりも有  
 まど。たあるとまへし大金の慶とぼく。煙つとる人と信ま治  
 九命あつて笑ひ一團一団のまが。家まよ命じて陰義あれも  
 いまごゑらる者奴家と二個がいつやよあつるれいといて見せりハ  
 ぞまよ。はしねとまよ小陰と費さバ草履草鞋の破る程が  
 換りといふと歩消しあつるまの河。いといと的るまよといふ  
 つまら。公あつるの推量小よも遠いといつてやまよ。致治治九命。  
 ともろがな付しハ竹山の陰義ハ竹と苛ちて同枕の道ハ蛇と  
 やらお救い夢坂潜り本過の死街よ。抗も持盛くといふ老



婆い生け強飲ぬる女も。金銀のたよいいうぬる悪ふも  
 組して。侮毒をくらにいいおぼるとす。及ひこれい。芳野に  
 毒酒とよへし。もがの。抗手持婆くふしやあらんと。推量と  
 と。密よ。容子。寂寂ひる。知まごころの。も育ちしと  
 い。む。まも。あ。う。な。げ。を。そ。い。は。ん。だ。と。あ。ら。い。と  
 是より本は。は。行。符。ふ。さ。う。同。合。え。ん。と。あ。ん。つ。れ。ま  
 只。成。と。や。め。抗。手。持。婆。め。く。が。任。お。を。り。け。ぬ。二。説。本。は。の  
 抗。手。初。儀。い。芳。野。が。異。病。の。文。を。取。り。自。殺。せ。し。と  
 す。て。心。表。よ。大。い。よ。飲。食。百。日。の。い。と。む。の。う。り。ふ。順。を  
 悉。い。と。ん。と。ス。り。や。抗。手。持。婆。く。寂。々。と。ら。い。密。る。の。後

じんとして南都の所。お。成。は。と。る。ま。と。て。静。る。ふ。よ。知。音。あ。れ。の  
 老。婆。と。同。道。し。く。彼。ふ。よ。も。其。お。ら。く。活。ア。九。命。の。扱。の  
 本。は。よ。り。く。お。ら。く。と。同。地。の。ふ。ら。う。が。一。面。い。ふ。ま。と。も。も。と  
 西。大。寺。の。け。方。よ。く。ふ。や。り。ぬ。る。農。家。の。う。り。く。へ。る。由。へ。お  
 面。の。教。教。よ。が。と。思。い。い。う。ひ。あ。り。も。白。紙。よ。互。た。の。文  
 る。破。屋。子。成。ま。く。二。個。が。密。法。の。顔。末。と。す。と。か。ふ。う。仕  
 海。と。り。と。後。ア。九。命。の。扱。互。よ。睫。り。う。う。づ。れ。余。新。も。ぬ  
 く。ぬ。つ。と。入。南。都。の。大。寺。信。井。お。の。か。二。房。よ。毒。酒。と。よ。へ。し  
 大。罪。人。密。り。と。お。ら。く。べ。す。う。う。い。ふ。ま。の。う。れ。ま。飲。を。し。て

兩人ともは縄うきまきと叫びてまゝ南をこき進み出た抗子持  
はやくと逃げしむせと進めお後初瀬の強がすなとまゝて  
いふまじが領主の家人ともそへるゝは縄うきまきと行ひま  
や壁より耳ありの聲申うまが密後ともひびきまきとそへる  
うきまきと捕らるゝ初瀬ともあらじともはま  
初せぬええまきとまきまきともいひつづゝは九郎い中  
忽ち一まきの孫中へ出し初瀬より向ひ初と初しげま  
三橋の市人五十枚治九郎とらゝりめりともはまき  
まきとらゝりめり初しげまきとらゝりめりともはまき  
まきとらゝりめり初しげまきとらゝりめりともはまき  
まきとらゝりめり初しげまきとらゝりめりともはまき

玄蕃どのへ内通しておれおまきまきとらゝりめりともはまき  
我らも金の夢より初しげまきとらゝりめりともはまき  
何方まで進めしむせと進めお後初瀬の強がすなとまゝて  
とて治九郎い老母初しげまきとらゝりめりともはまき  
歩みぬ。

十二回 家風

却説檀幼た巻いざん年大和國尚井おまきとらゝりめりともはまき  
武通のまきとらゝりめりともはまきとらゝりめりともはまき  
おまきとらゝりめりともはまきとらゝりめりともはまき

狂佛圖は消んとかりふはけ筒井の容もはまはしと  
 南都よ着く思ひやう願秀公のし状にのりたる  
 よしは中も母もふふとさかか人もいふも  
 と海どぶと身あしねがらう間の山の白きと竹およはして  
 遠前より二流松倉伊織が身可苗さひ糸とらふとの  
 いまごと初屋住の文にて海をよ流り見伊織が不貞をきて  
 大和とま返吟呻うらんと上の善妙と遠の月日依経て  
 やしといくく大いよ誓れた父の誓言よの俱に天と戴るべ  
 兄牙の離は兵隊及ますと曲終小入えととが雲うん  
 幸國々主ゆら美言及委しくれさんとて筒井山田の

近迎よ文と思ひく。兄伊織が切後の容もすべ願秀  
 の悪心いおもいさながく至家伯父のよりゆへ怪方はし  
 せめての這けいさせし高取玄蕃くさ當の敵らまが樂成  
 けり陰比の積り成時しまいらさんと公と責りしつど  
 けり中敵よ潰せのえさる我一個の浪士のめの人つりおる  
 是月代交も本堂とも違ふ返付よあの人程もさうり  
 めくしと東浦西北よめと潜り玄蕃が化出成るかい。一  
 法隆寺の辺しと不忌檀助た是しと志合互に編笠と括  
 これとまの結てくしにわたりおけり入真二郎の流命文  
 らとめのも中お見何織が切後せしゆともと泪まがらふ

明せがめを悪くあつるづれ来りし日伊織ののりまの御  
 承り及びも残念おどろけ行くとまゝ殿より回し置りて  
 一知りしはく筒井家の初節致さふひえりし山田  
 どの高取玄蕃を介侍候とつらひ順安公と退退  
 本より折願せんと申す係致の企ありとらんとされども  
 臨るる控按まけて根よる捕拷回も致しぬらぬと  
 系が身い先年仕へと降して團遠お及びぬらぬ  
 邪心お相れとて苦いあつるごまごちまのたよりと  
 垂んも本をこそ背り候侍らるる様今月け所ふおめ  
 する殿お出合しむいともふり交紳の通守にむいおんを

時来と根の根の校系と板とくは係致の棟梁高取  
 玄蕃お見仔細が敵りとして付た系介をかりてま  
 勢のおまゝお進めんと云々まごまごまおのづら山田  
 順安の悪く思ふもさやうのへへたのまゝ殿がたの  
 二末と今より武道の英をりして真二郎が忠厚と  
 固お安く治りんとする良討しを頼母しは是と  
 大いお頼高取玄蕃を歩いて見の勢と時と  
 家の買ひと除ゆんとかりぬらぬ殿と一殿とせり今日  
 一個のふとむらうと云々お移らふとくも本を  
 奉りまゝに真末様より似とて後日お送し



まる殿敵ららの助太刀と遊あそ下くださまきんとはい中ちゆうで武ぶ士し  
 小こ五ご郎らうも系けい行ぎやう時ときも速はやく傳でん入にゅう系けいと亡なして是こゝるは  
 来き世よは強つよさんと旁わららまゝなる如ごとく終はつの客きやく子こ本ほん斬ざんし守まも  
 ちる明あ山やま御ご助すけ這一この方かたより彼か玄げん書しよへ通とほ下くだ多た路ろ以い  
 て自こ滅めつさせんと一いっ個こうらぶれば逸とつ走し出でしけけ所ところと  
 遠とほくぬ擅と手て裏うら紐ひもらうしと赤あかゆるまが移うつらひ遠とほくぬ  
 急いそ河がの痛いたみ松まつ倉くらけりりといひく押お入し下くだ徳とくの早はや捷せつ  
 雲くも時ときも丁ていど骨ほね圖ず紙しと一いっ僕べつ伴ばんと兩人ふたりの御ご助すけと引ひ  
 たては茂しげ林はやしのうらへあつゝ幼こ左ひだり墨すみの紙しあけりりげてりし海うみの  
 明あ山やま御ご助すけのうらぶとやとん年とし系けい尚しやう井いおへ是こゝにこゝの石いし

公こう之の弓ゆみ射やりしつゝ武ぶ士しの殺ころしも入い先せん祖その家いへ名なを取と  
 さんとぬ。然しかし昔むかしの執しやく次じ紙し彩さいもしぬ武ぶ門もんは似に合あはれ来き待まち  
 小こも披ひ露ろふ及およびぬの形かたちは。雲くも中ちゆうの響ひびきの射や換か下くだ。巴よら  
 射や術じゆつの拙せつうさといふつゝ却かへて遠とほく左ひだり墨すみの小こ魚うい紙しと  
 合あひ。伸の手て板いたの表うらも。遠とほく矢や射やりからるまじ。是こゝに悪あくむ  
 船ふねが。御ご家いへ傳でん代だいの客きやく位ゐなりといひる。はこそ。御ご時ときのうら  
 主しゆ君きみと名なめたるまゝ。再またい仕し度どいこそせとく義ぎとちる。系けい  
 と。殺ころ害がいせんといひ移うつらふといひずとれども。非ひ義ぎ非ひ道どうのうら  
 細こみ。いりて傷きずみ。是こゝに悪あくむ。と。旧ふる悪あくと。是こゝに悪あくむ。と。小こいあ  
 う。これと先せん知ちり。松まつ倉くらの密ひそ法ぽうと。本ほん斬ざんし。思おもひ世よ知ちり



公應合志のどおりふちへ兼分配るうら。一たのりか玄妻  
 方へ若んとりふぞ一言よ逆をこのあらにまたり。命情く白  
 状せよと着しく責問若痛は絶ふ山田次郎源吉が  
 悪く小細し。高取玄妻をとくどめ生約。盤橋。二福川十市  
 美屋さんど一味して。順秀公は酒を飲さるまうせて  
 本社の苑街ふかひいし。松倉伊織は扇子扱とせ  
 しるまぐ。さほもさく白状ふ及び何とぞ助命は下され  
 よとけ場又ふまてさくは奥未練の初状なるも中く  
 釋らひし只一刀小井於人と血糸よし中る志うとと効  
 左馬押ら。後日の陰謀又ささる御助へまご國を

治りずしておれ人の藤忽さう。兼飾りちさく。まぬ  
 高取玄妻は又討死す日頃の幸望をせりよと  
 敵は露ふ方後取扱るま。真次郎大いよ。致は  
 月夜へのさく小井於。其さあいつんとおまが世の中は鬼  
 小角も飯の肴りさうとて。第一本と我菴と妻の後  
 小角は中強湯とて。懐中し。兄の敵と秘らし。父の心  
 のくよ。迷へども人と守六道の辻。流者とおひ。新井山田  
 の通御と飛細さとの不敵も又討死さう。老翁男女  
 集まを作し。さほもさる。

保は汝様し。うぬ。致。ふ。い。う。お。今日。の。生。一。生。

造悪不刃煩悩の塵よまを朝よ怒つたよらるる  
 貪賅癡癡の之香よ迷ひ候も佛法とらふり候  
 ましざりいあるる。ね。妻子信室及王位際命終時  
 不隨者といひて現世うて宝の山と築せり孫が  
 僕小わしげり是死よ縁し月よ肅とま上の業を  
 極るらるる。際終の嵐よ貪欲私貪の火の車開  
 海のやに裏と流し行とらんが目けの下人もはが  
 金銀衣振も身よはまを同持流しよま運らるる  
 落らるる。つらつら征まらるる。と運し。彼室に地獄の土  
 産名寄い焦燥の凡本も輸へらるる。おんをのわ

仏法より一公のわ成佛さしと心わらるるよされを  
 愚癡を智の凡ま公のわ佛氏求め。釋土のわに  
 淨土をわらるる。運らるる。の種とす。佛が大師の  
 此歎よ

此のよわに求るるをまらるる。初らるる。わわらるる  
 と縁し。天の教も。法苑珠林眼目の異名  
 一佛具名同一件。わらるるのわよまを運らるる。居らるる。わ  
 もまを運らるる。佛も。わらるる。わらるる。わらるる。わらるる。  
 一公不弘よ念仏せば己公の淨陀唯公の淨土をまを



中のほけり遊く小蛇はき。真以帝女おつとり巻松倉血  
 ふく今もども。多勢成相子よ只一個とぞに危く見し  
 如く檀幼を患つた。又まよかけさるる京本西刀は條の  
 道人群がる中よ斬く入内山御助が白杖ようつてる响  
 白小成をたまは這はし若く言んといかりも玄書ハ評議が  
 高の敵兩人成屋の務負りよ加はる集る傳人に分たりの  
 系ぶ一個も生てハ置じと檀が度言中おくしそのそ  
 明山が白杖せし町の死おねいと高丸玄書まき二帝に  
 後りあつた幼を患つハ多勢し白ひが時殺しよ其うらに  
 生弱盤摺云福川十市。置置の五徳はあくされうる約



それども玄書ハこころもいさす上段下段と排し  
 忠孝の女よ敵しどくはわふ松倉のま刀成りけ損じ  
 路とのまゑと消ふる。町の如く檀のま母ハ明山御助成  
 始め五十機活ハ九節。振り捧はせお救等が死後と携  
 出まろ一味の者とおぼしきぞ御助のいましを解て逃  
 去んしよはゆはせ好ましく首瓜おちる。陰美の程とまじハ  
 光の公の奇しし跡勿心まことむ女よ似合ぬとさうたハ流石  
 檀の母しよと松倉成どろま知へおけの花街の花開登り  
 知像が自殺の死後と戸板よのまのりたまふ。せねと悔  
 自業自得の委細ハ書言まよ。おそいと信る時しも筒井の

長後前井左門春の守馬してわけまゝ三宝山よましまん  
順永公の令小ううう。二島順永公のい水く押笈のふじし  
松倉まに糸糸う。見伊織がけん知よ三百石の加増と終る。檀氏  
ハせん年うう。愚賢瓜をさる。糸受由へを母儲とも終田と  
ふやうせに北集あまことのゆめ形りし。賞符とまよく流るる。  
首井の清あ終やう。順永公の所代辭ふおる。うう。檀  
幼左進がぶ忠義ふうまうとわいもる。あま名利がふい首井  
家の記録ふ戴がま。這一作思て知る。人うう。ううり  
うわのうう。うう。  
前井乃清水巻六 大尾

浪華書林前川文榮堂藏版書目 心齋橋通北久宝寺町 河内屋嘉七

女中庸瑪瑙箱 女版方第一の書 全一冊

此のうらふ見原先生は著のううう。ううう。ううう。ううう。  
被書ふられう。ううのううう。ううう。ううう。ううう。  
やうう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。  
ねのうう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。  
小ねん。ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。

文海周文萬字宝鑑 大冊 全

此は周文章の大蔵。ううう。ううう。ううう。ううう。  
あやう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。  
の清式又雅俗費用のう。大蔵。集。集。集。集。集。集。  
童蒙のう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
童のう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

大學小解 熊澤了米著 全一冊

大學は文と行をなす。七。七。七。七。七。七。七。七。  
まのう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
先生業のう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
おい。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

算法秘訣古車 増補版 全一冊

けい。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
妻。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
の外のう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
う。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

繪本百く一首 大冊 全一冊

う。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
う。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

歌術萬寶全書 全六冊

此書は古今の歌術を網羅し、その奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。凡そ歌の作法、調子、口調、筆致、乃至その秘訣、悉く詳載あり。凡そ歌の作法、調子、口調、筆致、乃至その秘訣、悉く詳載あり。

懷中小洞翁箱 寸本一冊

此は洞翁の懷中箱に收めし書物なり。其の書物、悉く洞翁の遺稿なり。凡そ其の書物、悉く洞翁の遺稿なり。

字林長哥 廣津先生著

此は字林の長哥を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。凡そ字林の長哥を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。

日本水土考 合刊三冊

此は日本水土の考を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。凡そ日本水土の考を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。

解毒國解大成 全二冊

此は解毒國解の大成を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。凡そ解毒國解の大成を撰し、其の奥義を明らかにし、後進に傳へしむるに便したるものなり。

作者

濱松歌國

画工

淺山蘆國

浪華版木師

山崎庄九郎刀

謡曲春榮物語

鬼卯著 全部五冊 寅春出版

捕公外傳 弥生佐久羅

東西南北雲画 全部六冊 前同断

文化十四年丁丑春正月發兌

書林

京都御幸町蛸茶師上 吉野屋仁兵衛  
大阪心齋橋通北久宝寺町 河内屋嘉七



